

## 博士論文要旨

土佐巖人

本論が目指すところは、ジャック・ラカンの精神分析理論を用いて、イデオロギーについて検討することである。我々を規定する無意識的構造を主題に据えるラカンの思想は、言語を重視するが、それは主体に先行して存在するものであり、個人の自由になるものではない。それはラカンによって〈他者〉と呼ばれるが、我々の欲望はこの〈他者〉によって規定される。このように外部的なものに規定される以上、主体にとって自らの欲望ですらも、主体を疎外する要素を持つものである。欲望のみならず、自己についてのイメージも、あるいは、自分を是認する〈他者〉の視座を前提としており、〈他者〉によってもたらされる関係性の中で、どのような場所に自分を登録するのかという問題になる。〈他者〉によって、欲望や自己イメージがもたらされるということになるのだが、この〈他者〉には、言語のみならず社会的な関係性や、共有された価値観、知の体系といったものが含まれる。我々が外部的な関係性や構造に規定されるという見地から、ラカンの精神分析を社会的領域に援用することは可能であるように思われる。

しかし、そうした構造主義的なアプローチのみが本論の目指すところではない。ラカンには確かに構造化された無意識というテーマがあるが、無意識の地図を作成することのみがラカンの精神分析の要点ではない。本論でも重視するのは、主体を規定する構造がもたらす欲望が働き続ける動因であり、また、主体にとってなぜ自らを規定するものが必要とされたのか、ということである。これに関わってくるのが、ラカン理論において、既存の

構造に組み込みえないトラウマ的なものとしての現実界である。この現実界に基づき、主体化の過程を検討することで、イデオロギーは単なる虚妄ではなく、主体の側からも必要とされるものであることが明確となる。またラカン理論の影響を受けた哲学においては、既存のイデオロギーを疑問に付し、世界観の変更を促す契機としても現実界は扱われる。

第1章では、こうした論点を明確にするために、ラカン理論で重要となるシニフィアンがどのようなものか見ていくことから始めて、現実界の概念を追っていく。これは、我々を規定する構造が常に不完全さを持つものであり、現実界という概念化できないものが常に付きまとい続けているということを強調することになる。この文脈の中で、ラカン理論にとっての症状や、転移、トラウマといった諸概念がどのように扱われているのか確認しつつ、以後本論で用いる概念的な道具立てを準備しながら、ラカンの理論が、バディウやアルチュセールの哲学とどのような点で交わるのか示すことを目指す。ここで触れた概念は、以後の章において、異なった角度から改めて検討されることとなる。

第2章では、ラカンの精神分析において、幻想と真理がどのように扱われているのかを考察する。これに合わせて、バディウとアルチュセールが用いる「真理」という言葉の意味を比較検討する。ここではフロイトが記述したハンス症例についての、ラカンによる解釈を見ながら、幻想や真理がいかんにして主体の欲望と関わっているのかを確認する。

第3章では、アルチュセールのイデオロギー論と、ラカンの精神分析の接点を問題とする。アルチュセールが示したイデオロギーの効果は、ラカンが想像的な関係と呼んだものと密接に関係しているというところから始めて、イデオロギーが単なる虚妄ではなく、主体にとって必然的なものであるということを論じる。これは、第2章で見た欲望を可能と

する前提について、社会的な要素を踏まえて検討することとなる。そして、イデオロギーはいかに批判されるべきかということを確認するために、アルチュセールの理論的変遷を追っていく。イデオロギーを批判するに際して措定されるのは、特権的に真理を司る立場ではなく、別様な視点であるということがここで重要となる。この章では、精神分析を重視するアルチュセールの立場を強調する論者として、あるいは批判者としてテリー・イーグルトンを参照し、また、精神分析による現代社会の分析とアルチュセールの理論との異同を確認するために、スラヴォイ・ジジエクの立場についても検討する。

第4章では、ラカンの論文「論理的時間と予期される確実性の断言」を題材に、主体化はいかなる過程を経てなされるのかについて考える。第3章までの議論では、主体を規定する構造が既にあるものとして論じられるのみであった。ここで、主体を規定される構造がもたらされる過程がどのようなものなのか、ラカンが示す寓話を通して考察し、その必然性を改めて確認する。

第5章では、欲動や対象 a について考察することで、現実界と主体がどのように関わっているのか、多面的に考察する。この章では、対象 a の「疎外」と「分離」の機能が問題となる。主体化の過程が進展することは「疎外」に関わっているが、もう一方の「分離」の機能は、ラカンの分析治療が終結する地点と関係している。

ここまですべてを踏まえて、既存のイデオロギーを批判し変革を志向するにあたって、その前に、構造の中の亀裂とまず向き合うことが前提として求められるということを確認し、結論を求める。イデオロギーに由来する、人間のあるべき姿や正常性は無条件に肯定されるべきではないとしても、ひとつの秩序に従うということも選択肢の一つとしてあり、分岐

点を明確にした上で社会批判や、変化を求める運動について考えるべきである、というのが本論の結論である。